

6 「コウノトリ育む農法」の普及経過と将来展望

生きものを育む技術の組み立て

野生コウノトリの絶滅は、農薬散布によるエサ生物の減少、農地の乾田化による生きものの生息場所の減少、営巣木となる松の減少などが要因とされている。当普及センターでは、コウノトリ野生復帰事業を地域農業の活性化につなげていくために、1992年から環境創造型農業実践事業の実施を契機に“新たな農法”の試行を開始し、2002年からはコウノトリの棲める環境回復をめざし「コウノトリ育む農法（以下「育む農法」）」の組み立てを行った。

2005年には、安全なお米と生きものを同時に育む水稻栽培技術「育む農法」の要件を、化学農薬や化学肥料の削減、生きものを育みコウノトリの棲める環境をめざした冬期間と田植え1カ月前からの水張り、田植え後から深水で7月上旬まで湛水状態を保つ水管理と定めた。この要件を満たす栽培技術を体系化するため、篤農技術や伝統農法を現地に合うようアレンジし、組み立ててきた。

但馬地域における普及

「育む農法」の水管理は慣行農法と大きく異なるため取り組む農家には不安がつきまとう。そこで2006年に「コウノトリ育むお米生産部会」を設立し、栽培講習会や現地研修会の開催、栽培だよりの定期発行を行い、新規栽培者でも水管理等に安心して取り組めるよう支援した。その結果、栽培は但馬全域



小学生と一緒に、「さぁ、生きもの調査」

に拡大し、2009年には部会員189名、栽培面積320haに増えた。(図)

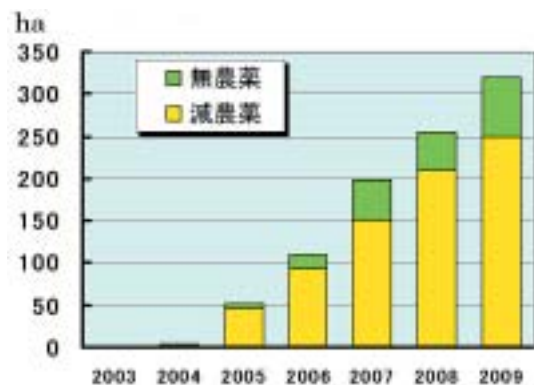
本農法実施地区では「田んぼの生きもの調査」を栽培者や地域の子供たちと一緒にを行い、「育む農法」で“生きもの”が増えることを肌で感じられるよう推進している。

継続できる農法へ

「育む農法」は無農薬栽培での抑草技術の安定化が大きな課題である。取り組み年数が経過するにつれ残存する雑草の種子量が増加し、雑草発生も増えて収量に大きな影響を及ぼしている。また長期の湛水により土中が酸素不足になり、移植苗の活着不良や有機物の蓄積も課題となってきている。これらの課題解決に向けて、県立農林水産技術総合センターの環境創造型農林水産技術支援チームの応援の下、除草機や輪作大豆など畑地転換による抑草技術の確立等を目指している。

今後は、地域農業の核となる継続できる農法へのさらなる進化を目指し、地域指導者養成講座の受講を修了した「育む農法アドバイザー」30名と「育む農法」の改善・普及・定着を目指した活動を展開したい。

北川 真輔（豊岡農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：0796 - 26 - 3705）



但馬地域における「コウノトリ育む農法」の面積の推移